

2020. 1. 7

畑 啓之

ジェネラリストとスペシャリスト 理系はスペシャリストであり続けねばならないのか

大学の理系学部に進学した者は、近年、大学院修士課程を修了しないことには就職が不利になる。特に一部上場企業においてそれは就職試験を受けるためのパスポートである。これとは対照的に文系学部については、企業は学部卒業生を欲する。その差はどこから来ているのか。自腹を切って2年間余分に勉強した理系卒業生は企業に入ってからその自腹分を取り戻せるのか。スペシャリストとして磨いた領域が会社で生かせると意気込んだが、その領域の事業を会社がやめてしまった場合にはどうなるのか。

日本の企業は新卒採用である。古（いにしえ）には理系も文系も学部卒業生を採用し、社内で訓練して自社の風土にあった社員へと育成した。この流れは文系卒業の学生についてはまだ当てはまるのではないか。経済学においてノーベル賞を受賞するような理論を、また経営学における最新の理論を、文系卒業生が企業に入ってからすぐに活用できるような機会はないだろう。またできない。経営学の新しい理論は、それが企業内において実用に供されるまでには、多くの会社が失敗を積み重ねた後の話である。従って、文系卒業生に関しては大学で習う程度の学識さえ持っていれば、入社後に十分に立ち回っていけることになる。

それに対して理系はどうか。こちらは日進月歩である。企業は最先端の技術を活用して新製品を世に出し続けなければならない。これが企業の宿命である。そのためには、大学において最先端の学問に触れた学生を採用し、1年目からその能力をフルに発揮してもらう必要がある。企業が考えるのは、学部卒ではこのような能力を持っていないに違いない。修士修了者ならまず大丈夫だろう。博士課程修了者ともなれば学識はあるかもしれないが、考える範囲があまりにも狭くなりすぎている。また、会社としては扱いにくいし、その事業領域から撤退したときにはつぶしも利かない。そんな話ではないだろうか。

かくして、理系は修士課程修了者が好まれ、文系は学部卒業が好まれることになる。

ここで、ジェネラリストとスペシャリストの話である。理系で採用された学生はスペシャリストとして期待されている。文系で採用された学生はジェネラリストとして期待されている。長い会社生活においては、単純に考えるとジェネラリストの下にスペシャリストが働く構図である。ジェネラリストはスペシャリストの仕事が理解でき、その業務をアシストできることが要件となる。スペシャリストの仕事が完全に理解できるジェネラリストなどいるはずもないのだが。それでも一般的に言ってジェネラリストの出世のほうがなぜか早い。